

## スガシカオ「19才」

馬場 良二（日本語教育学）

スガシカオは1996年、東京生まれの男性歌手で、大学卒業後、4年間のサラリーマン生活などを経て、1997年にメジャーデビューした。「19才」は、2006年の4月に発売されたスガシカオの作詞、作曲、歌唱になる楽曲で、子ども向きとは言えない「×××HOLiC」というアニメのオープニングテーマである。

唇に毒をぬって ぼくの部屋にきたでしょう？  
あなたのキスで もう体も脳も溶けてしまいそう

と始まるこの曲は、あやしい詩とメロディーでありながら、ソウルフルにパンチがきいている。

高校のときの現代国語に短歌の時間があった。その時、いくつかの短歌に関して調べて発表することになり、中に与謝野晶子『みだれ髪』から

その子二十 櫛にながるる 黒髪の おごりの春の うつくしきかな

があった。ほかの歌はアンチョコ、教科書ガイドに書いてあったまで見当はずれの解釈を述べ立て、えらく恥ずかしい思いをした。晶子のこの歌は、「音の流れがリズムカルだ」と力説したが、カ行音とラ行音が多い、ぐらいの指摘しかできず、口惜しかった。一つは、人の言うことを自分では何も思わぬまま丸写しにして恥をかき、一つは、思いはしたものの分析的、客観的に述べる力がなくて、くやしかった。

今だったら、短歌は、五七五七七の拍数の制限、決まりがあり、元来、韻文なのだから当然のことであるが、音を重視する。一句目「その子二十」が六で、破格。ここでぶつかって、あとはまさに「ながるる」。無声閉鎖音の [k] で切りつつ、

sonoKo hatati Kusini nagaruru KuroKamino  
ogorino haruno utuKusiKiKana

有声の鼻音 [m] と [n]、流音である弾き音 [r] でながれていく。

soNoko hatati kusiNi NagaRuRu kuRokaMiNo  
ogoRiNo haRuNo utukusikikkaNa

黒板の前で、顔を真っ赤にしていたことだろう、この歌のすばらしさを説明し  
かった私は、こんなことがいいたかったに違いない。

この歌を構成する子音を IPA で表記すると、[s n k h t t e e ŋ r m<sup>i</sup> ts] で  
ある。音声の流れは声帯の振動と声道の共鳴である。前者を止めるのは無声子音で  
あり、後者を阻害するのは子音中の噪音である。無声子音でも [s e h] は摩擦音  
であり、[t s t e] は摩擦音を含んでいる。これらは、音声の発生を完全にとめて  
しまうことはない。[ŋ] の調音に際しても声帯の振動は止まらない。

歌を構成する音のうち、流れを断ち切っているのは、何と言っても、くり返し現  
われる [k] である。黒髪 [kurokami] の [k] が断ち切り、[r m n] で流れを  
作っているのだ。

4月だっただろうか、たまにしか運転せず、カーラジオしか聞くことのない耳に、  
「19才」が響いてきた。日本語の音声の意味から引き剥がして、その音声をブチブ  
チに切り離し、自分の好きなようにデフォルメして並べなおしたような歌い方に興  
味を持った。どういう詞を、どういうふうに歌っているのだろうか。分析を試みた。

唇に毒をぬって ぼくの部屋にきたでしょう？

あなたのキスで もう体も脳も溶けてしまいそう

ai

大キライな ぼく 19才

aj、aj/ksaj

大キライな ぼく 19才

aj、aj/ksaj

吐き気がするくらい あなたの心美しいのに

何ひとつできないぼくに どうしてキスしてくれるの？

大キライな 日々 19才

aj、aj/ksaj/p

大キライな 顔 19才

aj、aj/ksaj

クロアゲハチョウの様に 誇らしい羽根で飛びたい

くだらないって言わないで そんな人生がいいの いいの・・・

汚れてる魂だけを 取り除くのが無理なら

どちらに歩けば それを未来と呼べるのでしょうか？ ai

宙ぶらりんな ユメ 19才

チューブラリーナ/n/ksaj

宙ぶらりんな ウソ 19才

チューブラリーナ/n/ksaj

クロアゲハチョウになって 誰からも愛されたい g/aj、ai

九分九厘ないとしても ほんの一瞬でいいの いいの・・・

大キライな ぼく 19才

aj、aj/ksaj

大キライな ぼく 19才

aj、aj/ksaj

クロアゲハチョウの様に 誇らしい羽根で飛びたい

g

くだらないって言わないで そんな人生がいいの

aj、aj/ʌ/?

クロアゲハチョウになって 誰からも愛されたい

九分九厘ないとしても ほんの一瞬でいいの いいの・・・

日本音楽著作権協会（出）0611766-601号

詞の中の  で囲まれた語はここでの分析に参与した語、~~~~~ は母音が、  
そして、\_\_\_\_\_ は子音が、それぞれ韻をふんでいるか音声的に類似している場合で  
ある。

出だしの2行の次には、繰り返し部分がある。

大キライな ぼく 19才

大キライな ぼく 19才

これを「だ～い きら～いな ぼく じゅうくさ～い」と歌っている。その「だ～い」と「きら～い」に含まれる/a/と/i/の母音連続が、連続して完全な下降二重母音になっている。IPAであらわすなら [aj] だ。下降二重母音というのは時として、後部要素が完全な音価をとらない。主成分たる前部要素から、[i]なら[i]の調音の構えの方向に諸器官が動くが、きちんとした[i]の構えにならぬまま二重母音を終えてしまうことがある。英語に特徴的である。この場合の「だ～い」と「きら～い」とがまさにそうで、はっきり「い」という調音、発音にはいたっていない。音声だけ聞いたのでは日本語的でなく、「大嫌いな」という語に結びつかない。

「19才」も聞き取れない。「9」には、「きゅう」と「く」という二つの言い方があるが、「く」は「9時」で、「19才」は「きゅう」でなくてはならない。「十九(じゅうく)」でとめず、そこに「才(さい)」をつけたのかもしれない。ここでの「く」は、次が「才」の[sai]なので、母音が無声化した「く」になっている。[kju:sai]のはずが、[ksai]になっている。この「くさい」[ksai]の部分が、タイトでシャウトなパンチをきかしている。

その「くさい」、1回目は「い」がはっきり聞こえる [ksai] である、2回目は「だい」と「きらい」と同様 [ksaj] となっている。

基本的に「あ」と「い」の母音連続は、日本語らしからぬ下降二重母音 [aj] と発音している。「い」の発音が不明瞭で、長い「あ」のあとにつけた似的について、宙に消えていくように発声される。その中とところどころに、「い」の発音の明瞭な [ai] が現われる。たとえば、「体も脳も溶けてしまいそう」、「誰からも愛されたい」。後者の「愛」は [aj] と歌っている。「くだらな～いって言わな～いで」にも連続した下降二重母音 [aj] が現われ、エキセントリックな雰囲気をも出し出している。

「あい」の中で一つだけ、「それを未来と呼べるのでしょうか？」の「らい」だけは、「らい～」と「い」が伸ばされており、二重母音と解釈することのできない母音連続となっている。

大キライな 日々 19才

大キライな 顔 19才

次の繰り返し部分の「日々」は、どう聞いても「ヒッピー」である。メロディーにのせているので [çibi] の個々の音の長さは意味がないから、[çib:i:] となってもしかたがない。しかし、日本語において両唇閉鎖音の声の有無は意味の弁別をする重要な特徴であって、[b] を [p] としては語義が変わってしまう。もしかしたら、本人は [b] で歌っていて、ただその閉鎖が強く長いので促音が入った「ヒッピ」のような発音となり、日本語では促音の後には無声の閉鎖音しか来ないから [p] と聞こえているだけなのかもしれない。

次々とたたみかけるように発せられる特異な発音、歌唱は、歌全体に不思議な魅力を与えている。

詞を語に分けてみた。異なり語数で81あった。たいていの文章がそうであるように、一番多いのは格助詞の「の」（7回）である。その次が「19才」（6回）、終助詞の「の」（5回）、格助詞の「に」（5回）、接続助詞の「て」（5回）、「ぼく」（4回）と続く。

名詞では、「クロアゲハチョウ」が2回、1回ずつ現われるものに「唇」「毒」「脳」「吐き気」「羽根」がある。2回繰り返される「宙ぶらりんな」を入れてみると、それだけでも詞のあやしさが伝わってくる。

その「宙ぶらりんな」は、撥音の「ん」が「な」の [n] に吸収され「チューブラリーナ」と発音されている。日本語の音声をその意味とは関係なく、バラし、組み立てている面白さだと思う。同じように、「クロアゲハチョウ」「くだらない」の「く」が繰り返される。「ククククロアゲハチョウ」「クククダラナイ」と歌われても、何と言っているのかよく分からない。何と歌っているのかが分からないところが、またあやしい魅力となっている。

ガ行鼻濁音というものがあり、共通語では、語中のガ行音は鼻音の [ŋ] で発音される。「銀行が」なら、最初の「ギ」は語頭なので軟口蓋有声破裂音の [gi]、一方、「ガ」は [ga] ということになる。しかし、現在では、共通語であっても、この [ŋ] は現われにくく、一般的に軟口蓋有声摩擦音の [ɣ] となっている。スガシカオにもガ行鼻濁音は現われず、破裂音と摩擦音が見える。「クロアゲハチョウ」

は、強く閉鎖してパンチをきかせ [g] で、「そんな人生がいいの」では、やさしく摩擦音 [v] となっている。

母音の出だしには、声門閉鎖音の [ʔ] を入れてもいいし、入れなくてもいい。「そんな人生がいいの」に続ける、「いいの」の前には声門閉鎖音の [ʔ] をおき、きっぱり言い切っている。

冒頭の2行を母音と子音に分けて表記してみよう。母音の表記の - は、対応する拍が促音であることを示しており、子音の表記の - は、対応する拍には子音がないことを示している。

uiuiouou -e	ouoediiiaeou
KTBrnDK -ntt	BKnhynKTDsy -
aaaoiue	ooadaoooooeeiaioo
-NtNksd	M -kRdMN -MtktsM -s -

1行目には、声の有無を問わず閉鎖音が多いことに気づく。閉鎖音の多用で、パンチのきいたスタッカートな歌唱を可能にしている。一方、2行目の子音には、晶子の黒髪の歌と同様、[m] [n] [r] といった楽音が多く、流れるような印象を与える。そして、母音では [aaa] や [oooo] といった同じ母音の連続が見られ、この音構成もなめらかな聴覚印象を与える。

[i] と [e] に関しては、同じ母音が三つ以上連なる語はない。しかし、[u] には「くくくく」と「じゅうく」がある。これら同じ母音を連続して含む言い回しを入れたり、「あ」と「い」の母音連続の処理の仕方を工夫したりとが、この歌の母音の特徴となっている。